

森林、里山や都市緑地などの環境と生物との関係の解明とその自然環境・生物多様性保全や病虫害対策への活用

専攻：森林・環境資源科学専攻

学科：生物環境科学科

研究室：森林保護学研究室

氏名：梶村 恒（教授）



『研究キーワード』 穿孔性昆虫；種子食昆虫；微生物；野ネズミ；共進化；繁殖生態；親子関係；種子散布；貯食行動；樹木枯死；森林衰退；森林保護学；樹木医学；生態学；保全生物学；フィールド科学

『研究シーズ・スキル』（1）昆虫－菌類共生系解析；（2）野外操作実験

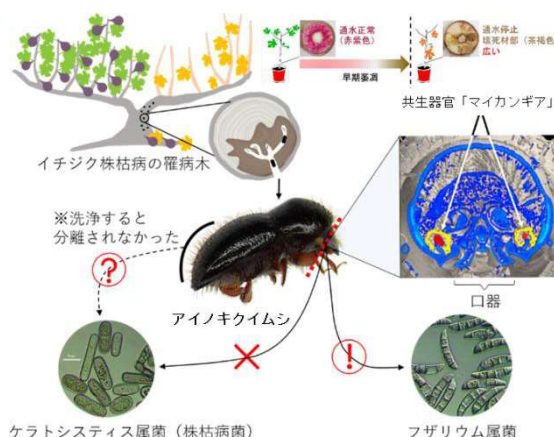
『WEB サイト』

研究室 HP：<https://forest-protection-nu.jimdofree.com/>

研究者総覧：https://profs.provost.nagoya-u.ac.jp/html/100002414_ja.html

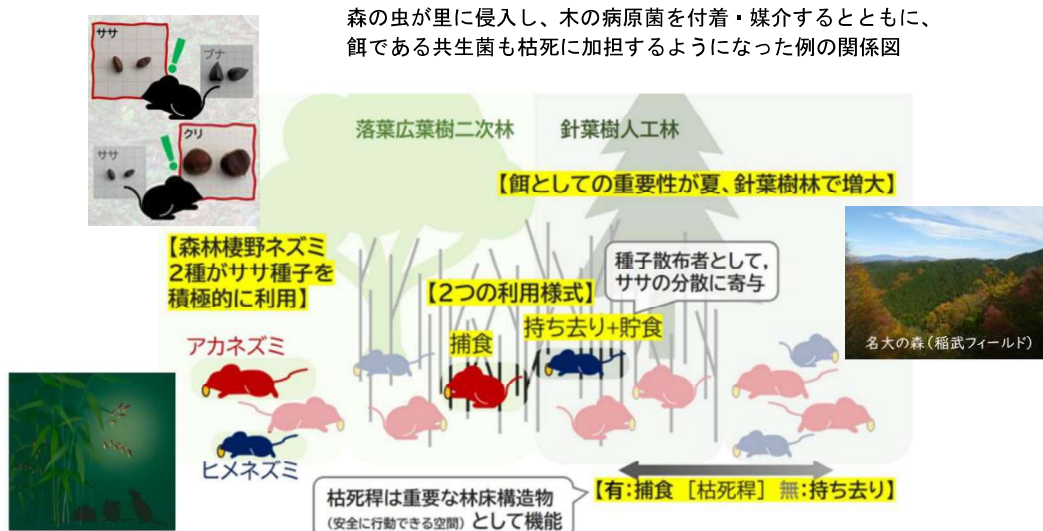
○ 昆虫による菌類の利用とそれが樹木に与える影響

菌類を樹木に接種、中には繁殖させた菌自体を食物としている昆虫がいます。それらのミクロな共生機構を野外調査や様々な実験・分析手法を駆使して解明し、生物多様性の創出・維持を考究しています。共生菌の諸性質を調べて、有効利用の可能性を探るとともに、樹木の衰退・枯死に関わる場合はリスク評価と防除法の提案を行っています。



○ 森林における種子をめぐる生物間相互作用

樹木、下層の草本を含めた植物の種子は動物や昆虫の食物になりますが、その形質や生産パターンに差異があります。一方、種子を地中に埋める動物がおり、後に掘り出して摂食されなければ、発芽（次世代生産・分布拡大）できます。このようなダイナミックな生物間相互作用の真相に、森林内での生態調査や種子供試実験などで迫っています。



野ネズミによるササ種子（120年ぶりに結実）と樹木種子の利用様式を実証した結果の模式図